

「カラコロ、カラコロ」木とビー玉が触れ合うとき、とても優しく心地の良い音が響く。そのとき感じた音の記憶はいまでも耳に残っています。

今から13年前、ある雑誌の中で、4色のビー玉がとても楽しそうに見える木のおもちゃと出会い、木のおもちゃ作りという世界へ引き寄せられました。私がおもちゃ作りの仕事を始めてから見つけてきた木とビー玉、二つに共通していると思う事は、触れているとどこか懐かしいと感じる事。大人になつた

# 緑のエッセー

いまでも木のおもちゃに触れていられる事がワクワクした気持ちを生んでいます。私は現在、作り手として木のおもちゃと向き合う毎日を過ごしています。新しく作ったばかりのおもちゃなのに、生まれながらに懐かしい。そう感じられる事が木の持つ力の一つだと思います。

近年、木育という言葉が生まれました。私は木を通して多くのことを感じ、多くのことを考えます。仕事をしている上での事だけではなく、木を目の前にしていると生きていく

上で大切な事や自然との共存など、多くのことを教えられているような気がしてきます。私が木から学び、考えさせられたように、木のおもちゃを通して子供達へ何かを残していきたいと思うようになりました。

私は、おもちゃを手にしたときの木の感覚をととても大切に考えています。いま楽しく遊べるだけでなく、木の感覚がいつまでも手の記憶として残るようなおもちゃを作りたい。そんな思いを持ちながら木を磨くことに力をいれています。「体に刻み込まれた記憶はい



つまでも残っているもの」。そして、それらの記憶はふとした拍子に蘇るものだと思います。木のおもちゃで遊んでいた子供達が大人になったとき、木を懐かしむようういてほしい。そのとき感じるもの、木の温もりをさらに子供達へ繋いでいってほしいと思います。作り手から使い手へ、親から子へ、木とビー玉がかすがいとなって人との繋がりを持ち、より多くの子供達へ伝えられていくことを願っています。

スタジオノートで作られるおもちゃのほと

んどは北海道のカバの木でできています。厳しい自然の中で生き抜いてきた木は堅くて丈夫という特徴を持ち、子供の成長とともに沢山のキズやヨゴレがおもちゃに書き留められ、おもちゃとしての役割を終えた後も思い出のアルバムとしてずっと残り続けます。そのためにも木のおもちゃは丈夫でありたいと思います。何世代にも渡って受け継がれた木のおもちゃは多くの歴史を持ち多くの想いが詰まっています。それらを手にした時、多くのことを考え、感じる力が私の考える木育で

平成5年、北見高等技術専門学校木工科卒。家具製造、口グハウス作り、金属加工等を学んだ後、平成9年、木のおもちゃ工房カラコロに就職。平成19年、スタジオノートとしておもちゃ作りを開始。  
<http://www.studio-note.cc/>

す。沢山の子供達へ木のおもちゃを届け続けるためには沢山の良い木を森に残していかなければなりません。私のできる小さな一歩として、もの作りを通して、木への関心と楽しさを多くの子供達へ伝えていければと思います。



写真手前、ビークルカー  
木球を回すとビー玉もクルクル。

写真奥、クルクルサンサンカー+ (プラス)  
ヒモを引くとビー玉がカチカチ音を立てて回ります。